

昭和女子大学 内部質保証推進本部外部評価委員会 報告書

日時：2022年6月6日（月）14:00～16:00

場所：昭和女子大学 学園本部館3階中会議室

出席者：【学外】（五十音順・役職名は外部評価委員会開催時点）

朝比奈豊 毎日新聞グループホールディングス相談役、

足立直樹 凸版印刷株式会社特別相談役

茂呂真理子 日能研本部 常務取締役

渡辺修 石油資源開発株式会社 代表取締役会長

※岩本康 世田谷区副区長は書面による評価

【学内】

坂東真理子理事長・総長、小原奈津子学長、吉田昌志副学長

井原奉明内部質保証推進本部本部長、清水史子内部質保証推進本部委員

緩利誠内部質保証推進本部委員、山内浩内部質保証推進本部委員

中島さやか内部質保証推進本部委員、井口寛佳内部質保証推進本部委員

石川雄太内部質保証推進本部委員

開会に先立ち、坂東理事長・総長から開会の挨拶があり、コロナ禍で制限を受ける中、工夫を凝らし学生たちの学びの機会を保証しようと努め、また、社会の要請に対応できる大学にしていけるよう取り組んでいる最中だが、まだ十分な成果を上げていないものもある。外部評価委員会では、「ここが分かりにくい」「もっとこうの方が良い」等、中立的な立場から忌憚のないご意見をいただきたいとの発言があった。

続いて、井原内部質保証推進本部長から外部評価委員会の趣旨説明、学内の出席者および外部評価委員の紹介があった。

その後、「2021年度自己点検・評価報告書」の中から、評価の基準1、3、4、8、9の特記事項を中心に説明を行い、外部評価委員から評価・提言をいただいた。

報告（1）（緩利内部質保証推進本部委員）

○基準1 理念・目的

基準1では、昭和女子大学の理念、目的を記載している。理念・目的は、学内で実施し

た様々な取り組みや成果を通じ、大学全体で共有されている。

また、2021 年度は「昭和女子大学の未来とビジョンを語る会議」の開催、学園イメージソング「For Our Dreams」の制作及び第 3 回 NIKKEI 全国社歌コンテストでの優勝、「2021 年度実就職率ランキング」（大学通信発表）で、卒業生 1,000 人を超える大学の中で、女子大として 11 年連続 1 位を達成（実就職率 92.9%を記録）するなど、大学の理念や目的に沿った取り組みを実施し、成果を残すことができた。

○基準 8 教育研究等環境

基準 8 では、教育等研究環境について記載している。2021 年度は、創立者記念講堂やグリーンホール等の中～大規模ホールの改修、昭和デジタルスクエアの開設、各教室のデジタル・ICT 環境の整備、キャンパスの緑化や 3 号館横に学生の憩いの場を増設する等、教育現場の状況や環境に配慮しながら、より充実したキャンパスを目指した改修・整備を実施した。

[外部評価委員から]

外部評価委員から、学園イメージソング「For Our Dreams」の制作や NIKKEI 全国社歌コンテストでの受賞について、高い評価をいただいた。

報告（2）（井原内部質保証推進本部長）

○基準 3 教育研究組織

基準 3 では、大学の教育研究組織のうち、2021 年度～2022 年度にかけて実施した組織体制の変更点について記載している。

・学部

教育の目的に応じて、学部名称の変更（生活科学部から食健康科学部への変更）やセンター名称の変更（総合教育センターから全学共通教育センターへの変更）を行った。また、食健康科学部、国際学部において、同一学部内の教職員の連携強化や学生支援体制、事務作業の効率化等を目的として、各学科の事務室として設置していた「教授室」を廃止・統合し、「学部事務室」を新たに設置した。

・大学院

2021 年度から生活機構研究科に社会人を対象とする 1 年制コースを開設するなど、大学

院での新たな学びとして、専門職を担う人材養成の強化に注力している。2022 年度からは文学研究科言語教育・コミュニケーション専攻に現職の中学校・高等学校の英語教員や教員経験者を主な対象とする 1 年制コース（英語教育専修コース）を開設した。

・組織

職員の管理職への早期登用（学内公募による新たなキャリアパスの創出）、業務改善や能力開発等のための SD 活動の充実を目的とした学内外での研修を実施している。

[外部評価委員から]

外部評価委員から、大学院 1 年制コースの概要や入学者の状況、今後の展望について質問があり、意見交換を行った。文学研究科言語教育・コミュニケーション専攻で主に現職教員等を対象に英語力強化を目指す 1 年制コースを開設したことについて、時代の要請に適う取り組みであるとの評価をいただいた。

一方で、1 年間で修士号を取得できることで学位が軽視されることがないように、社会的な理解を得られる説明が必要であるとの意見があった。

○基準 4 教育課程・学習成果

基準 4 では、本学の教育課程・学習成果について記載している。

・全学共通教育科目

全学共通教育科目を通じて、学生は学際的なテーマや各自の専門とは異なる分野の基本的な知識、考え方等を広く学ぶことができる。また、様々な学科から集まった学生が共に学ぶことで学びの相乗効果が生まれることが期待される。

・グローバル教育

アメリカ・マサチューセッツ州ボストンにある「昭和ボストン」への渡航留学再開（131 名参加）、日本国内でオンライン留学を希望する学生向けのプログラム開発、渡航留学再開にあたってのコロナ感染に関する危機対応など、コロナ禍にあっても様々な対策を講じて、本学の教育の柱であるグローバル教育を遂行した。また、隣接するテンプル大学ジャパンキャンパス（以下、TUJ）とのダブルディグリー・プログラムでは、2022 年度 5 月、4 名の学生がテンプル大学で学位を取得することができた。本学と TUJ は、連携講座・連携授業を実施する等スーパーグローバルキャンパスとして、双方の学生同士が交流し学び合うことを可能としている。

TUJ 以外でも中国・上海交通大学、韓国・ソウル女子大学とのダブルディグリー・プログラム、諸外国の協定校への留学も実施しており、グローバル教育は着実に成果を上げている。

・キャリア教育

キャリア支援センターの支援のもと、インターンシップを実施し、昨年度は 110 の企業・団体で 334 名の学生が参加することができた。学生が卒業後のキャリアプランやライフスタイルについてメンターに直接相談することができる「社会人メンター制度」では、個別にアドバイスを受けるメンタリングが 453 件、グループでアドバイスを受ける「メンターカフェ」「メンターフェア」は、それぞれ 8 回、22 回実施し、244 名、1130 名とコロナ禍にあっても非常に多くの学生が参加した。

・数理デジタル教育

数理デジタル教育を推進するため、2021 年度から新たに全学部の学生を対象としたデータサイエンス科目を開講し、初年度実績として入門レベルには 650 名を超える学生が履修した。

・リーダーズアカデミー

自立・自律した学生を育てるという観点から、リーダー育成のためのオナーズプログラム「リーダーズアカデミー」を開講している。2021 年度は 19 名の学生が参加し、SDGs をテーマにグループで研究活動を行い、研究成果の発表を行った。

・ポートフォリオの導入

2022 年度 4 月から、学生の目標、到達段階を可視化できるように学内ポータルサイトにおいてポートフォリオのシステムを導入した。

・IR の活用

Institutional Research (IR) を活用し、様々な観点からデータ分析を行い、分析・結果を基に教育活動の改善策に繋げている。

・FD 活動

教員の教育力を上げることを目的として、FD 講演会や FD サロン、また、全員参加型勉強会を実施した。

・数値目標

資格に係る国家試験等において数値目標を設定し、合格者数、合格率の向上に力を入れている。2021 年度は全国平均を上回る合格率を達成することができた。

[外部評価委員から]

外部評価委員からは、グローバル教育を中心に質問があり、意見交換を行った。特に、コロナ禍の渡航制限により日本人の海外留学者が減少する中、日本にしながら海外大学の教育を受けることができるテンプル大学ジャパンキャンパスとの連携、ダブルディグリー・プログラム、海外に自大学のキャンパス（昭和ボストン）を持つという特性を生かした必須留学プログラム（国際学部、ビジネスデザイン学科）に関して、高い評価をいただいた。

一方、社会から見た本学の教育（特にグローバル教育）については、十分に浸透している状況とは言えないため、今後の課題として一般的な認知を高めるために、どのようなアピールが必要か、広報活動の在り方についての検討、今後の積極的な展開の必要性について意見があった。

○基準 9 社会連携・社会貢献

基準 9 では、本学の社会連携・社会貢献の取り組みについて記載している。

・ **新型コロナウイルスワクチン職域接種**

2021 年 7 月～10 月にかけて学生支援及び地域貢献の一環として、新型コロナウイルス対策のワクチン職域接種を実施した。また、2022 年 3 月から 3 回目のブースター接種も実施している。

・ **地域連携、産学官連携**

本学では、教育・研究等の取り組みの成果を広く社会や地域へ還元するため、世田谷区や地方自治体、産業界と連携した協働プロジェクトを実施している。これらの取り組みは、同時に「プロジェクト型学修」として、学生が主体的に課題解決に取り組む機会となっている。

[外部評価委員から]

自己点検・評価報告書の中で、基準 9 は本学の取り組みが積極的に記載されており内容が充実しているとの評価をいただいた。一方、基準 9 以外の記載について、評価項目ごとに実績に基づく現状説明や今後の展開、改善策を網羅的に記載している点は評価できるものの、グローバル教育やキャリア教育など本学の柱となる取り組みについての記載量が少

なく、淡泊な印象があり、報告書も対外的にアピールする手段として積極的な記載をしてはどうかとの提案があった。

講評（まとめ）

・渡辺外部評価委員

報告書の内容の補足説明や資料も拝見し、大変意欲的にいろいろな試みを実施されていると感じた。それらを上手に世間に周知することが重要である。昭和女子大学の卒業生はこういう体験・経験を大学で積んでいるということを積極的にPRする、特にグローバル教育については、今、日本からの留学生が減少しており日本全体が内向きになりつつある中で、オートマティカルにボストンへの留学プログラムがあるということ、これらを中学生や高校生に浸透させ、昭和女子大学に入るメリット、利点を見せていくことができれば、高いポテンシャルティーを持つことになる。腰を据えてしっかり取り組めば、さらに展望が開けてくる。昭和女子大学にはそういう素材がたくさんあると感じた。

また、自己点検・評価報告書では、グローバル教育に関する言及は一部分に限られている。例えば「2021年に取り組んだ重点事項3点とその成果」など、焦点を絞って記載した方が良いのではないかと感じた。全体的に非常に控えめな印象がある。PRしたい部分、強く訴えたい部分、次に繋げていきたい部分をしっかりと記載することにより、報告書の読み手にも気合が伝わり、さらなるPRに繋がるのではないかと感じた。基準9ではそれが表れていたが、他は全体的に地味な印象だった。報告書の書き方には工夫の余地がある。よくやっている部分を上手く表現することで、自己点検・評価報告書を読むことがより楽しくなるのではないかと感じた。

・朝比奈外部評価委員

本日の説明を聞き、非常によく取り組まれていると感じた。自己点検・評価報告書では2021年はどうのことに取り組み、2022年からはどうしていくのかということが記載されており、実績に基づいてさらに一歩進めていくという姿勢が理解できた。基準3では、2021年度には生活科学部を食健康科学部に名称変更したことが簡潔に記載されている。この変更は先見性を持ってやっていると感じた。また、大学院改革も地道に進めている。企業でもデータを全て揃え、エビデンスを基に報告書を記述するという事は容易なことではないが、この報告書はエビデンスもかなり揃えられていて良い報告書になっている。た

だ、あまり謙虚になり過ぎては損だと感じた。例えば、基準 2 では、内部質保証の取り組みについて、「より適切に PDCA サイクルを回すため、エビデンスに基づいた自己点検・評価を実施していかなければならないが、まだまだ十分ではない」との記載がある。ここは既に十分取り組みができていないかと思うので、謙虚もほどほどが良い。また、昭和女子大学の長年の取り組みの中で、社会的な評価の点からも、しっかりと成果を上げていて素晴らしいものとして「就職率」がある。報告書では数行程度で記載されているが、ここはもっと内容を加えても良い。大学教育が社会のためにどのように影響しているか、どういう人材を育てているか、ダブルディグリー・プログラムや、社会人向け 1 年制コースで英語の教員を育てていくこと等、非常に良い試みがある。卒業生の実績が少ないということがあるのかもしれないが、今後の目標としてエビデンスになるので、もっと強く打ち出しても良い。外部からの視点で見るとさらに書き方が工夫できるのではないかと感じた。

・足立外部評価委員

大学の理念に「世界とつながる」「地域や社会とつながる」ということが記載されている。このような大学のビジョンをもう少し具体的に、学生や社会に対して周知していくことが重要ではないだろうか。そのためにどのように広報活動を展開していくのが重要なポイントになる。5 月 31 日の朝日新聞の紙面で各大学の広報が掲載されており、昭和女子大学はグローバル教育と女子大学で 11 年連続実就職率ナンバーワンであることが掲載されていた。一方で、この報告書ではキャリア教育やキャリア支援がどうあるべきなのかについて、あまり記載されておらず、もっと書き込んだ方が良いのではないかという印象を受けた。大学の支援の在り方、活動の在り方等をもっと前向きに表現しても良いのではないか。また、就職率ナンバーワンは今後 20 年間続くという保証はない。今後も優秀な学生を集めるために何ができるのか。極端なこと言えば今からでも小学生、中学生の保護者に対する広報活動を行う等、自分の子どもを昭和女子大学に入学させたいと考えてもらえるように、将来に向けた広報活動をどのように展開していくのか検討する必要がある。

また、高校から大学へ推薦入学制度があるが、最近是自己推薦制度があるというように聞いている。例えば自己推薦制度を利用し、キャリア経験がある、または、留学経験がある人に昭和女子大学を選んでもらえるよう大学の地名度を上げていくことも必要だろう。そういう学生が将来の大学を背負って立ち、社会に出て活躍することで、大学を広報して

もらえるようになる。そのような人材を確保するためにも、大学の姿を広く浸透させる取り組みに期待したい。

・茂呂外部評価委員

昨年度もこの会議に参加し、1年程度しか経過していないのだが、細部から変わり続けている昭和女子大学を感じることができた。どの取り組みも簡単にできることではなく、様々な変化を1年間で生み出すということは、学内の制度変更も含めて大変な労力を要することだろう。なぜそのような変化を生み出すことが可能なのか、どうやって学内一体となって取り組むことができたのか、その理由をアピールしていくことも他の学校との一つの差別化に繋がるのではないだろうか。

ダブルディグリー・プログラムに関しては、国内でも近年実施している大学が増えてきている。5年先、10年先には、ダブルディグリー・プログラムでは他大との違いをアピールできない時代がやってくるだろう。これからは、ダブルディグリーを取得した卒業生が、どのように社会で活躍しているのか、それらを対外的にアピールしていくことが非常に重要だと感じた。

「中期方針」では、「自立し、自律し、グローバルに活躍する人材の輩出」が目標に掲げられている。この「ジリツ」とは、言い換えてみれば何か。資料では女性のリーダーシップについて書かれているが、女性のリーダーシップという言葉そのものが食傷気味になりつつある時代に入っているように感じる。本日の説明で「リーダーズアカデミー」というオナーズプログラムの話があったが、これからの時代は「オーナーシップ」が重要になるのではないかと。日本財団が3月に公表した「18歳意識調査-国や社会に対する意識-」で、自身と社会との関わりについて「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」と回答した日本の若者は26パーセント程度で、諸外国、アメリカやイギリスに比べて低い傾向にあった。これは日本の課題のひとつだ。リーダーシップももちろん重要だが、社会に参画して社会そのものを変えることができるという意識をどうすれば育てることができるか、今後の教育では非常に重要になるのではないかと。昭和女子大学のプログラムには、「リーダーシップ+オーナーシップ」の色合いがあり、これからの社会において非常に強い取り組みであると感じた。学生たちが当事者意識を持って社会を変えていくこと、「ジリツ」して社会で活躍してくれるということを是非アピールしていただきたい。

以上の講評の後、小原学長から外部評価委員からの提言、評価に対しての謝辞と、創立者の精神を受け継ぎながら、自立・自律し、人のため、社会のために世界で活躍できる女性を輩出できるよう取り組んでいきたいとの発言があり、閉会となった。

なお、公務のため外部評価委員会を欠席した 岩本外部評価委員からは、別途講評をいただいた。

・岩本外部評価委員

自己点検・評価報告書を読んで、まずは、10 の基準に沿って、的確に自己評価され、改善策をたてられていることは、素晴らしいことだと感じた。

コロナ禍が続いている中で、昨年に比して、少しずつ対面型の活動を再開されるとともに、「アフターコロナを見据えた大学教育」を年度テーマに取り上げ、ハイフレックス型授業への取り組みや環境整備など、具体の対策を取られてきたことは、評価できる。

感染拡大の波が収まらない中で、世田谷区においても数々の事業において、感染対策と社会活動の活性化の両立に苦慮している。限られた学生生活での個々の学生への影響は大変大きく、是非対策を続けていただきたい。

物価高や、新型コロナウイルスの感染再拡大など、学生を取り巻く生活環境は、引き続き厳しいのではないかと考えている。現在行っている多面的な学生支援については、今後もしっかりと継続、充実されることを期待している。

昭和女子大学は、2020 年度に創立 100 周年を迎えられた。「世の光となろう」という教育理念のもと、教育目標をたてられているが、昭和女子大学の教員や学生の皆さまには、世田谷区のさまざまな事業に、参加・協力いただいている。企業において、パーパス経営ということばが使われるようになったが、今後とも大学として、地域や社会に貢献できる力を養うことを基本理念に、グローバルに活躍する人材が育成されることを願っている。

以上